

そのまま康成の名を自分で使うようになった（そのため長男は現在「康陽」と名乗っている）。一九六八（昭和43）年東京芸術大学教授の田村耕一に師事し、「いろいろ試すことも大事だが、作風を一つに絞ることも大切だ。練上にしぼるのがいいのではないか」と教えられ、以後それを忠実に守って作陶をすすめた。

一九六九（昭和44）年第九回伝統工芸新作展に初出品し「練上手大鉢」で奨励賞を受賞、次の年は「練上手辰砂鉢」で日本工芸会賞を受賞した。そしてその次の年は日本伝統工芸展において日本工芸会総裁賞を受賞した。これだけ世間の注目を急に浴びることになったのは、康成が、今までにない新しい陶磁の世界を切り拓いたからである。

●陶芸では信州で初めての「人間国宝」

練上または練込は、中国では唐や宋の時代に、朝鮮では高麗青磁の一部に、そして日本では桃山時代の志野焼などにみられる伝統的な技法である。練上は色の異なる土を重ねたり練り合わせたりして文様のある生地土を作り成形する技法である。二種類以上の土を使うので、乾燥や焼成の過程で亀裂が入りやすいのだが、康成は色剤などを用いてこれを克服した。

成形には型を使うほか、文様を組み合わせた板状の土を筒に巻きつけ、筒を抜いて□□□を回し、内側からひらひらませるといった手法を考案した。表面をひら



ねりあげしろうれつあかねてつぼ
練上嘯裂茜手壺 1982年作
茨城県陶芸美術館蔵

ませる過程で生じるひび（亀裂）は、複雑な文様を作り、そこからさまざまな技法が生まれ、全く新しい陶磁の世界が開かれるようになった（練上嘯裂文）。

晩年には「玻璃光」という技法による硬質な光沢に包まれた作品を発表している。国内はもちろん、康成の作品は世界各国の展覧会に展示された。一九九三（平成5）年、重要無形文化財「練上手」保持者（人間国宝）に認定された。信州生まれとしては初めての、陶芸分野での人間国宝である。

●作品の根底にある宇宙観

康成は自分の作品について「（私のつくってきた陶器は）壺のようなまるい形の作品が最も多かったように記憶しています。何故かというところ、まるい珠の形は、

この宇宙が目指している唯一の形ではないだろうかという思いにとらわれてきたからです」と語っている。また、兵庫陶芸美術館長の乾由明は「（康成の作品は）外見上は煌めくような感覚的魅力に満ちた芸術作品であっても、これを内から観ずれば彼の独自の宗教的思念が結実したものに他ならない。」と評している。

七〇歳を超えてからも数々の作品を発表し続けた康成は、二〇〇三（平成15）年四月死去。茨城県陶芸美術館に康成作品三〇〇点が寄贈された。

生まれ故郷の信州は、ずっと康成の脳裏にあったに違いない。その遺志をついで、二〇〇五（平成17）年、遺族から信濃美術館に康成の大作一〇〇点が寄贈された。それを記念し、同年信濃美術館では「信州が生んだ人間国宝、土と炎の奇跡、追悼松井康成展」が開催された。

（吉川徹）

参考文献

- 松井康成『宇宙性』講談社
- 『松井康成陶器作品集』講談社
- 信濃美術館『土と炎の奇跡 追悼松井康成展』朝日新聞社

佐久の先人たち³⁶

人間国宝に認定された陶芸家

まつい こうせい
松井康成

(1927~2003年)



佐久生まれ、茨城県笠間町の住職となった松井康成は、「練上^{ねりあげ}」という手法で新しい陶芸の世界を生み出し、人間国宝に認定された。彼の作品には物と心の統一があるという。没後、遺族から信濃美術館へ100点に及ぶ作品が寄贈された。

だが、とにかく頭は良かった。よく家にも遊びに行きたし、うちにも遊びに来た。父親は勤めに出ていたから記憶にないが、母親はいつも自宅で針仕事をしていたのが印象深かった」という。

一九二九(昭和4)年の世界恐慌は日本経済を直撃し、生糸輸出の激減、糸価の暴落は製糸業や養蚕農家に大きな打撃を与え、昭和恐慌と言われる時代が始まった。一九三六(昭和11)年三月、父は製糸業の鐘紡(かね紡)をやめ、三ツ輪屋染工場を川崎市伊勢崎町に開業し、それに伴って一家も引越した。美明は九歳、川崎市旭町尋常小学校三年に編入し、この頃父の染の仕事を手伝った。

●アルバイトで製陶所の手伝い

神奈川県立平塚工業学校工業化学科に入学した美明は、一九四四(昭和19)年、一七歳の時、学徒動員で平塚海軍火薬廠^{かやくじょう}に行ったが、爆撃で工場が焼失、茨城県日立製作所^{あひだ}にも赴いた。川崎の自宅も戦災を受けたので、家族は父の生地である茨城県笠間町に疎開移住した。一九四五(昭和20)年、同校を卒業。

終戦を迎え、父母のもとに戻った美明は、アルバイトで笠間の月崇寺^{つきたか}下にある奥田製陶所へ通い、口口口の技術などを学んだ。一九四七(昭和22)年明治大学専門部文科文芸科入学、この頃から東京国立博物館に通い、中国・朝鮮・日本の陶磁を研究した。また、浄

土宗律師^{しゅうし}養成講座受講のため、大正大学にも通った。

一九五二(昭和27)年明治大学文学部文学科卒業。この年、月崇寺住職松井英功^{へいこう}・米子の長女秀子と結婚。松井姓となった。翌年住職が病に伏したため、大学卒業後勤務していた取手第二小学校教諭を辞め、月崇寺に入った。その頃から、日本画を習って、翌年には県展に出品するほどになった。一九五五(昭和30)年、月崇寺二四世住職となった。

●「練上^{ねりあげ}」で新しい技術を生み出す

月崇寺には江戸時代安政年間(一八五四~一八五九)に築かれた窯があった。一九六〇(昭和35)年、美明はこの窯を復興し、日本の古磁器を研究して、それを模した作品を制作し、また練上技法を試作研究した。

一九六二(昭和37)年、長男が生まれ、「康成」と名付けたが、その後美明が作品を展示会などに出したとき、「康成」という名を使い、それで入選したので

●小学校二年まで過ごした佐久望月

一九二七(昭和2)年といえば、本牧村望月(現佐久市)はまだ生糸景気の中にあり、製糸工場もあって、近隣から多くの人々が集まっていた。料理屋には芸者衆もいて賑わいを見せ、翌年には中山晋平が訪れて「望月小唄」がつくられるという時代であった。

この昭和2年五月、賑やかな街の中心で、松井康成は父宮城與四郎^{みやぎよしろう}、母喜和乃^{きわの}の次男として生まれた。本名は「美明^{みめい}」である。幼いころいっしょに遊んだ近所の人たちは、美明をよく覚えていて、「おとなしかつ



ねりあげせんもんおおぼら
練上線紋大鉢 1973年作
茨城県陶芸美術館蔵